



Title	キルギスにおける高校生の進路選択パターンとその背景：インタビュー調査を通じて
Author(s)	トクトスノワ, ローザ
Citation	日本中央アジア学会報, 17, 34-35
Issue Date	2021-07-31
DOI	10.14943/jacas.17.34
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/89141
Type	article
File Information	JB017_007toktosunova.pdf



[Instructions for use](#)

キルギスにおける高校生の進路選択パターンとその背景 — インタビュー調査を通じて —

トクトスノワ・ローザ

問題設定

キルギスの若年層には、過去30年間で、高等教育の拡大と海外移住労働者の増加という二つの現象が表れた。

まず、高等教育が急速に拡大していく。1995年に高等教育機関に在籍する人数は約64600人であったが、2007年には250460人に増加した。キルギスの高等教育の特徴として、通信制・遠隔制の学生が、全体の中で少なくない割合(全学生数の約3分の1)を占めていることが挙げられる。このことから推測できる重要な点は、勉強しながら働かなければならない状況にある若者が少なくないということだ。通信制・遠隔制の学生の中には、働かなければならない状況に直面している学生だけでなく、キルギスからロシアへの移民として生活する若者も含まれる。

過去30年間で、キルギスの若年層においては、海外移動の現象もみられた。移動する人々の大部分がロシアに行く。先に述べたように、海外、とりわけロシアで働きながら、通信制・遠隔制の学生として勉強している者もまた多い。

このように、グローバル化の影響のもと不安定なキルギス社会を生きる若者の困難のうちの1つは、働きながら学ばなくてはならないことである。しかも、それはしばしば、ロシアなどの海外への移住と通信制・遠隔制という教育形態を必要とするのだ。

しかしながら、彼らが働きながら教育を受けたり、ロシアなどの海外に移住したりするため、通信制・遠隔制教育の選択に至るプロセスは、先行研究で見落とされてきた。移住労働と進学とを同時に行う選択をしている若者の進路形成において、移住労働がどのような意味を持っているのかについては、十分に明らかにされていない。この背景を探るため、本研究では、すでに移民となった移住労働者ではなく、移動前の若者を対象にし、彼らが進路形成における困難をどのように認識しているのか、どのような条件や認識がそれぞれの進路につながっているのかを明らかにする。

方法

本研究では、ロシアに移住し労働しながらキルギスの通信制・遠隔制教育を受けるという

学生の進路選択について、国内の全日制教育を志望する学生と比較検討する。このため、ジャラル・アバド州のA地区の国立小中高一貫校の最終学年に在籍する高校生(11年生)11名を対象に、半構造化インタビュー調査を実施した。調査時期は2017年8月～10月である。

結果

分析の結果、奨学金制度の不備、経済的要因、ジェンダー化された不平等、ネットワーク、ロシアに対するイメージ、家族扶養意識が重要な要因となっていることがわかった。

大学の学費が平均所得水準をはるかに上回っている状況と奨学金を利用できる機会の少なさは、若者の教育機会の平等の実現にあたって乗り越えなければならない問題である。通信制・遠隔制教育の学生が全学生の3分の1を占めるというキルギスの現状は、教育機会の不平等な社会に生きる若者たちが進路形成において直面している問題と地続きであり、若者の多くが働きながら勉強できる環境を選択せざるを得ないことを示している。

また、これまでの研究でも、低い生活水準、経済的な機会の不足が人々を出身国から離れさせていると指摘されてきたが、通信制・遠隔制教育を選択し、海外に移動しようとする若者も経済的に困難な状況にある。

さらに、農村の社会はジェンダー化された不平等のある社会である。農村では、肉体的な力が重要である農作業や牧畜の仕事に、女性に不向きとされるものが多いため、村が女性にとって住みにくい場所となっている。

また、通信制・遠隔制教育を選択し、海外に移動しようとする若者の移動先に関する意思決定プロセスにおいて、移民のネットワークが重要な役割を果たしている。

移動先のロシアにおいては、若年層が不法移民になったり、劣悪な住環境、人種差別などの問題に直面している。このことについては、若者たち自身、移動前から知ってはいても、家族を重要視してそのような進路を決めることが明らかになった。つまり、若者の進路形成における重要な変数として家族がある。

ロシアにネットワークがなく、あるいは親戚・友人のロシアにおける失敗をみて、ロシアについてネガティブなイメージを持つようになり、結果としてロシアに行かないようにする若者もいる。彼らは、進路形成において直面する問題を奨学金によって解決しようとするが、奨学金制度が少ない状況では、彼らの進路が志望どおりになる保証はない。奨学生になれない場合、結局ロシアに移動せざるを得なくなる可能性もある。

本研究では、高校生を対象に通信制・遠隔制教育を選ぶ若者について論じたが、移動後の通信制・遠隔制教育の学生の状況の検討は、今後の課題としたい。

(東京大学大学院教育学研究科)